

下総津宮村名主文人「窪木清瀨」の書物出版と『補訂鄭註孝経』復元考証

杉 仁

はじめに——在村における孝経——

「孝経」は、「身体髮膚これを父母に受く…」の語とともに、寺子屋など経書入門の書としてひろまったが、そのあつかいを在村の書物出版活動として見直すと、少なくとも四つの動きがみえる。

第一は、中国佚書で日本にのみ伝存した「孝経」の復元と考証。これは都市文人の方が多し。第二に、在村文人の「孝経」注釈書の執筆、第三に、中央文人の「孝経」注釈書の在村での再版行、第四に、孝経碑建立や教材出版の動きである。多くが、在村の寺子屋・郷学・私塾がらみの、書き物もふくめた書物出版活動となる。

伝存する孝経は、古文は「古文孝経／孔伝本」二十二章(以上孔伝本)、今文は「孝経／鄭注本」十八章(以下鄭注本)の二本。

ここでは、右の第一の一つとして、後者「鄭注本」を復元考証した下総香取郡津宮村(つのみや取市)の名主文人「窪木清瀨」(以下清瀨)の『補訂鄭註孝経』をとりあげ、在村における書物出版活動の実態を、一つ見てみたい。^{①)}

窪木本『補訂鄭註孝経』は、天明末年起筆、寛政六年擱筆、文化元年刊。すでに太宰春台『古文孝経／漢孔安國傳／太宰純點』(享保十一年刊)の渡来によって孔伝本を得た中国で、「鄭氏不可得」(盧文弨)とされた鄭注本、その復元と補訂および出版である。都市文人の二〜三例とほぼ同時期、唯一在村ですすめた事例となる。

津宮村は利根川河畔の香取神宮まぢか、文字通り香取

詣の船着き場に鳥居が建つ。門前口の河岸場として小町場をなすが(赤松公臣『利根川圖』志、安政二年序)、ほぼ西へ一里上流の最寄り佐原村が、河岸と醸造と門前宿の在方町として、小都市をなす。清洌(宝曆十二年)は津宮村の名主家に生まれ、名清洌、字仲黙、通称太郎右衛門、号竹溪、息耕堂。香取根本寺の吞舟上人に学んで数学・暦学・国学などに長じ、私塾「息耕堂」も開いたという。師は朱子学系とされるが、師弟ともに朱子批判の言が多い。在村折衷独立派というべきであろう。

佐原村の「伊能忠敬」は年長だが、ともに上方を旅するなど、親交はふかい。いわゆる「伊能図」の協力者の一人で、おもに地名記入など仕上げ作業を、忠敬歿後もすすめたとされる。²⁾ 忠敬も、清洌の『補鄭註孝経』に文化元年序文「補訂鄭註孝経序」(後述)をよせる。水戸藩儒「小宮山楓軒」とも親しく、楓軒主導の郷学「延方学校」へ招かれ、教授もしている。墓誌も楓軒の撰文による(詩は翠軒、序は翠軒、男立原住)。

I. 窪木清洌の木活字蔵版本

窪木清洌の木活字本 著述は経書関係で『補訂鄭註孝経』の

ほか、『孝経独見』をのこした。『経義勸説』・『孝経孔傳翼註』もあつたらしい(近世學者著、述目録大成)。そのほか、少なくともつぎの六書を自家蔵版している。①②④⑤は、中国叢書本は国内に多くのこるが、和刻本は見あたらない(管見内、教示之)。
(* 印は木活字版)

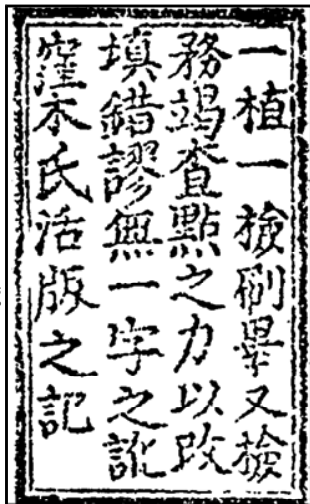
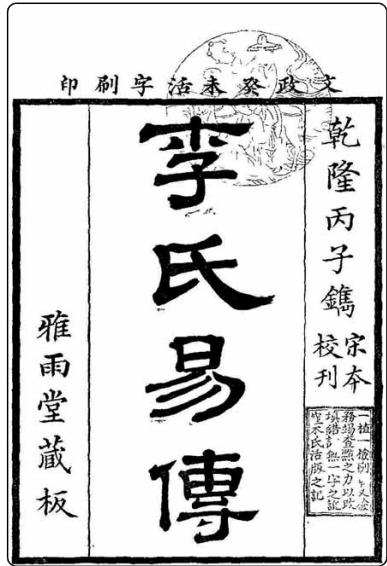
- ① * 宋 蘇軾『蘇東坡志林』三卷三冊。
文化六年息耕堂校活字刻(大阪中之島、内活、24)。
- ② 宋 范成大『桂海虞衡志』一卷二冊。
文化九年 窪木清洌序 窪木俊校(國會特、1712、坂学問所旧蔵本)。
- ③ * 宋 朱子『朱文公増損郷約』一冊。
文政元年戊寅八月 息耕堂活字(見、未)。
- ④ * 唐 李鼎祚『李氏易傳』(易、伝)一七卷一〇冊。
文政六年 下総窪木氏息耕堂刊(柏崎市圖三餘、堂資料目録、未)。
- ⑤ * 宋 蘇軾『蘇氏易解』(蘇軾、易解)九卷四冊。
文政十二年 窪木氏息耕堂刊(内閣文庫、ひび、昌島、平坂学問所旧蔵本)。
- ⑥ * 窪木清洌『息耕堂略誠告訓 付負来子紳言』。
年不詳(見、未)。

全体に、蘇東坡・范石湖など、素朴楽天的な理想家肌とみなされる田園詩風の宋代文人を好み、かれらの撰する志(遊志とも、志は記録)や易経の解釈に傾倒したらしい。③は宋「呂

大鈞・大臨」兄弟の手になる 陝西省藍田（長安縣外の県）の地域共
 同体の規約「郷約」が、朱子の補訂でつたわつたもの。
 このうち*印①③④⑤⑥は、手製木活字によるもの
 で、いわゆる「近世活字版」になる。活字版は、小部数
 のみという短所をかかえたまま私塾版・私家版・医書な
 どで復活し、安価な版費と簡便さが重宝がられたとされ
 る。ここではどうだったか。さきに木活字版のようすを
 みておこう。⁽³⁾

手製の木活字本は、版下通りに彫る職人仕事まかせの
 製板本とどうちがうのか。まず活字を手彫りで貯えねば
 なるまい。何個ぐらいか、あらたな活字があれば、彫り
 貯えるのか。活字や梓木を植え込む盤や梓木はどうする
 のか。一丁分だけか何丁分ぐらいか。枠内に一字づつ植
 えていくとして、誤植の有無は試し刷りで確かめるのか。
 誤植が無ければ必要枚数を刷り貯めていくのか。刷り貯
 めては一丁毎に活字を組み直していくのか。

④文政六年『李氏易伝』および⑤文政十二年『蘇氏易解』
 には、見返し右欄下方に、朱印で興味ふかい内容を捺し
 ている（挿図参照）。
（南城文庫本）



読み下せば、「一植一檢、刷り畢リテ又々檢シ、務メ
 テ查点ノ力ヲ竭ス。以テ改メテ錯謬ヲ填メ、一字ノ訛
 無シ。窪木氏活版ノ記」となる（以下二植）。

「一植」つまり一個每一丁毎に植え込む…、「一檢」一丁毎に試刷する…、一文字づつ査点する…、誤字を改換する…、一字の誤植も無い…、そう断言して「窪木氏活版之記」をむすぶ。文字どおり一植一檢くりかえしの苦心談を、④⑤二本の全冊に、朱で捺印したのである。以降すべての木活字本に捺すつもりで印刻であろう。

「一植一檢印」がしめす木活字版の苦心談は、諸書にもみえる。活字数は「木子二万余」や「作活字数万」など、刷り部数は「活版刷二十部」、「活刷数部、以テ同志ニ伝ウ」など少数だったこと、木活字にした動機は「家塾講習之用トナス」ため、あるいは「活刷数部、以テ同志ニ伝ント欲ス」るため、さらには「写ハ謬誤実ニ多」ので「原書ニ就テ校し、活字版ヲ用テ印成り、復タ謬誤ナカラシム」る正本を作るため、などがみえる(前掲「活字版目録」所引「刊語」による)。

ここでは、『蘇氏易解』の克明跋(原文)が、「家君、此ノ書ヲ出シテ俊ニ命ジテ曰ク、汝、盍(なほ)蓄(たくわ)ル所ノ活字ヲ以テ之ヲ刷印シテ同志ニ貽(おく)ラザラン」とする。活字数は明記しないが、いつでも版を組めるよう、手製の木活字をたくわえていたようすをしめす。ともに手作り活字版な



らではの活動といえよう。

なお見返し上部に、童子をしたがえ北斗七星をいたたく騎乗の文人像らしき丸朱印が捺される。実見し得たものでは、『訂鄭註孝経』房総文庫本・岩坪充雄本のほか(筑波大にはない)、④『李氏易傳』、⑤『蘇氏易傳』

にみえる。いわゆる「魁星印」で、「魁星」は北斗七星の第一星あるいは第四星までをしめし、文章をつかさどる神として科挙受験でも信奉されたという。清淵は、自家蔵版に神の加護を願ったことになろうか。

木活字版の「志」 なぜ窪木父子は木活字版をえらんだ

か。①②は「志」つまり「記録」である。国内で詩集が有名かつ和刻本の多い蘇東坡・范石湖だが、記録文集「志(遊歴なる遊志)」であることに注意したい。さきのように両書とも、和刻本は窪木本のほかはみえない。なぜまた、文人

の監修や書肆の刊行でほとんど無視されている「志」の版行なのか。

①『蘇東坡志林』は「記遊」「祭祀」「人物」「古迹」「論古」など、各地の紀行・見聞・民俗・人物考・歴史考ほか多岐にわたる。蘇東坡は、紙片さえあれば常に何ごとか記しては囊中に溜めこみ、それを後人が選んで集としたものが多いといわれる。その一つ、小地域の民俗誌く博物誌的な記録といえよう（挿図参照。潜確居は陳仁壽。明末長洲の人。進士、翰林院。）。

手製木活字を刻んだ嫡子「克明」の跋は、「志林一書、即手漫筆ノ緒余ノミ。其ノ記注スル所、雜碎鎖屑、統紀

文化己巳 孟春刷印	蘇東坡志林	潜確居藏本 聚珍正式 不索市利
息耕堂校刻		

無キガ如シト雖モ。而テ亦彼中ヨリ流出シ来ル故、論古諸条則チ正大嚴励、苟モ假アラズ」と記す。統一なきようにみえる漫筆にこそ、蘇東坡の文章の正しき嚴しさがにじみ出ていると感じたのである。

つづけて、「家君（潜）、麓中二志林一部有リ。ミズカラ類書中ヨリ抄出ス。間ニ闕条有リ。頃日、全集ノ所収ニ就テ更ニ之ヲ校シテ活字ニ之ヲ刻ミ、同士ト坡公ヲ欽（つ）ミ、共ニ其ノ風猷ヲ仰ントスルノミ」…父清澗が書き抜き、座右の手箆においていた…。欠条も全集から補訂したので、同好の士とともに愛読したい、というのである。

②『桂海虞衡志』（以下『虞衡』）は、范石湖の南方の臨桂県（桂林ほかの自治区）での地誌。桂林の巖洞景観、香・酒など特産物、禽獣虫魚など動物、花果草木など植物、現地族のようすなどを記す（虞衡可は山林山澤の管理官の意）。おなじく小地域の民俗誌く博物誌的な記録である。

清澗は序の冒頭で、「宋范石湖ノ遊志ハ、其一曰、攬轡録、全国ニ奉使ノ時ニ作ル所也。其次曰、驂鸞録、虞衡志、南方ノ作也。其次曰、吳船録、出蜀ノ記也」と、南北にわたる「遊志」を列記したうえで、こうのべる。「石湖ノ文

范石湖先生著

桂海虞衡志

下総

晴俣堂藏版



章、澹麗清逸ニシテ自ラ一家ヲ成ス、…而シテ風流蘊藉、亦如斯。愈益文人詞士ノ欽慕鑑省ス可キ所以ナリ」…このたび、「児俊、好ミテ衡志ヲ読ミ、之ヲ校刻スルニ及んだと」。

克明跋もいう。はじめて范石湖を読んだ『呉船録』(一名^田記)で、「其ノ記事ノ瞻麗」さに感動した…この『虞衡志』も、「巖洞之美、及ヒ禽獸蟲魚花、果草木之類、無所不備ザル所無キ」ところが、じつに興味ふかい…。「小地方^{小地}」ト雖モ、学者タルベキノ資、此ノ類ハ猶有ン焉」…。どんな小地方のどんな小地誌でも、「学者」たるべき

人の資質がこめられる。しかも「皆其ノ地ヲ踏ミ、其ノ勝ヲ記シ、而テ其ノ実ヲ詳ラカ」にしている点が貴重である…。「遂ニ此ヲ校刻シ、以テ同好ノ資ニ供」したい…。「他日マタ之ヲ継イデ攬轡録ヲ校訂シ、以テ公ノ遊志ヲ悉」したい…。そう記しながら「文化九年壬申春三月上巳ノ下総窪木俊克明書」でむすぶ。同好の士に資するため、范石湖の「遊志」すべてを刊行するつもりだ、というのである。字体は、ほかの活字版の明朝体ではなく、やわらかめの楷書。自筆の版下によるらしい(神因^{参照})。

桂海虞衡志

宋 吳郡范成大 紀

志巖洞

余嘗評桂山之奇、宜為天下第一、士大夫落南者、少性ニ不知、而聞者亦不能信、余生東吳、而北燕、幽薊、南宅、交廣、西使、岷峨之下、三方皆走、萬里、刃至、無不登覽、太行、常山、衡嶽、廬阜、皆崇高雄厚、雖有諸峯之名、政尔、魁然、大山峯、去者、蓋強名、之、其疏、魏、奇、秀、莫如、池之九華、歛之黃山、括之仙都、温

桂海虞衡志

一

「遊志」とはいえ事実上、苛酷で危険な遣使の遠地、左遷の地、あるいは流刑の地、そしてその往復路での記録が多い。しかし窪木父子は、むしろそうだからこそ、「学者タルベキ資」がいつそう際立っていると感じたらしい。正大嚴励たる雅風、淡麗清逸にして蘊奥きわむる風流、現地をみずから踏むがゆえの詳細さなどもあわせ、愛好しつづけたのである。

父子は、蘇・范どちらの蔵板でも、「同士ト共ニ」、「同好ノ資ニ供スル」などを強調する。ひろく同好の在村仲間^{（一）}に供するために、手製木活字を活用したのである。少数ながら安価で簡便なのが活字版の利点だとされるが、その利点は、在村の同好仲間でもより有効に作用したといえる。近世活字版の効用の一つとみるべきであろう。

「志」の読み方 しかし、都市文人や中央書肆が、和刻本としてほとんどかえりみない書の蔵板である。窪木父子の考え方は、藩儒など都市文人とどうちがうのか。加賀藩儒「錦城」大田元貞^{（以下）}^{（藩儒）}が、その窪木本『蘇東坡志林』によせた序文「刻東坡志林序」をみよう。

錦城は、「三蘇」と称された蘇氏父兄弟^{（父蘇洵と蘇軾、蘇轍兄弟）}の世評の高さなどにふれて一定度評価しながら、あえて二箇所

で、「是皆此書之失也」とする。なぜ「失」なのか。「之ヲ要スルニ。子澹^{（蘇東坡の字）}ハ奎宿謫降、神仙中之人也」、天から降りてきたような、世の常人をこえた存在である…。その言語文辞は「奔逸絶塵、縦横自在、礼俗之義ヲ以テコレヲ律スルベカラ」ざるものだが、今この書をこまかく読むと、「浮躁軽快、極口善罵、詬争^{（ひととな）}之氣ヲ免レズ」…。なぜか、「蓋シ其ノ人為リヤ、有才ニシテ無徳」であるからだ…。それゆえ「老イテ海外^{（海隅）}ニ遠竄^{（配）}シテ没世スル」ような「流落不遇」の最期におわたつた、とする。

末尾でふたたび、「子瞻ノ才学文章、厥角^{（くま）}シテ久しいと評価しておきながら、然るといえども「詭譎軽脱、浮薄ヲ風ト為」すがゆえに、「恒ニ世ノ此公ヲ欣慕スルヲ悪^{（にく）}んでゐる…。そういいながら、礼記の章句「愛而知其悪、悪而知其美」をひき、「偏ニ愛憎スル、聖賢大ニ戒ム」とする。世の人が蘇東坡を欣慕するのを憎む…。聖賢が戒める愛憎偏重のあやまりだ…。だから私は「其書ノ得失ヲ論ジ」て序文とする…。そういいながら「文化戊辰^{（文化）}臘月十日/加賀公幹氏大田元貞序」でむすぶ。古今内外の諸人に愛読された蘇東坡を、浮薄・浮躁・詬争^{（のうじ）}のし）・無徳としたこともふくめ、蘇東坡を欣慕する

世人（清濁もふくまれる）を「悪ム」とする序文は、過激な論を好むにしても、尋常ではない。蘇東坡に対する見方は、大きく異なることになる。

窪木父子が、文章そのものからうける感覚判断を第一にしたとすれば、錦城は、世の礼俗秩序にかなうか否か、流落不遇か否かなど、道德判断を第一とした感をみせる。流落不遇に追いやられてもなお湧出する雅風や詳細な現地観察に感動するか、逆に、流落不遇におわるような軽薄不徳とみて得失のみを論ずるか。その違いは大きい。

蘇・范らの「志」を都市文人や書肆がほとんどかえりみなかつた事実、逆に在村文人が仲間内の愛読のため自家蔵版をすすめた事実。その背後に一つ、こうした在村文人と都市文人との読み方のちがい、その根源をなす生き方のちがい、ひろく文化的価値観のちがいがあったとみることもできよう。

そもそも清洵は詩作が得手でなく、遠出の旅も好まなかつたという。詩集は遺さず、紀行文も、伊能忠敬につよくさそわれた上方の『西遊紀行』のみにとどまる。それだけに、蘇・范らの民俗誌く博物誌的な小地域の記録に、人一倍つよい関心をもちつづけたと考えられる。

在村文人は、目前の自然や田園、生業や習俗を題材とせざるをえない。在村田園詩派のさかんな活動や南宋田園詩集覆刻の動きは別考した。ここでは田園詩をはなれ、蘇・范ら宋代文人の地誌・民俗誌・自然誌をふくむ「志」を、都市文人以上につよく愛慕し、在村仲間で見あひあうべく自家蔵版をすすめていた。

上総の在村で少なくとも二本、蘇東坡および范石湖の「志」の木活字自家蔵版は、在村における書物出版活動の見逃せないの特徴の一つといえよう。

II. 窪木清洵『鄭註孝経』と日本の「鄭注本」

日本の鄭注本 清洵『鄭註孝経』は、天明末年起筆、寛政六甲寅（一七九四）年の摺筆だが、さきに日本全体のようにすみておこう。「鄭注本」は、律令以前に渡来したが中国では亡失、宋代の日本僧「裔然」の猷呈本も失われ、日本にのみ残存する『群書治要』に、抜粋だけ唯一のこされたとされる。

元和二年に銅活字本「羣書治要五十卷」が刊行された。寛政期には尾張藩で「羣書治要五十卷」唐魏徵等奉勅編

／細井徳民^(平)等校／天明七年／尾張藩／據元和二年銅活字印本校刻」を刊行した。このとき、尾張学派の鄭注本考証もすんだらしい。清淵が在村で復元考証をすすめたのとはほぼ同時期となる。

「羣書治要」に抜粋だけがのこるゆえか、復元も考証も少ないが、つぎの[1]と[5]を実見できた。

- ① 宝曆三^(一七)年序「良芸之句」^(良野)『孝経鄭註』^(以下良野本)。
- ② 寛政三^(一七)年序「藤益根校」^(河村益根)『孝経鄭註』^(本)。
- ③ 寛政五^(一七)年序「岡田挺之校」『孝経鄭註』^(岡田)。
- ④ 寛政六^(一七)年序例「窪木清淵」^(本)『鄭註孝経』^(本)。
- ⑤ 文化十一^(一八)年序「東条一堂」『孝経鄭氏解』^(東条)。
- ① 宝曆三年京儒「良野華陰」の良野本がはいが、のち疑義が投じられる^(後)。② 寛政三年益根本および③ 寛政五年岡田本は、ともに尾張藩版『羣書治要』の刊行にたずさわった藩儒など、尾張学派によるもの。③はのち渡清して『知不足齋叢書』第二十一集に収録される^(後)。書肆「山城屋佐兵衛」による文化十二年再版本もある。
- ⑤は「清 洪頤煊」の『孝経鄭氏補証』の東条増放本で、東条一堂は房総出身の弘前藩儒のち江儒^(江戶儒者)とされる。
- ④ 窪木本の摺筆および出版時期は、「序例」が「天明

末年ヨリ補訂ヲ志シ」たとし、「寛政丙寅仲夏日 下総 窪木清淵仲黙謹識」^(丙寅は寛政六年甲寅カ)でむすぶ。寛政丙寅はないが、おなじ寅の寛政六年甲寅が摺筆年であろう。②③とは一年あるいは三年の遅れとなる。遠く離れた下総の地での

天明末年以降の執筆は、②③とほぼ同時期とみてよからう。時期順では二番目の三本中の一本となり、在村唯一の鄭注本になる⁽⁴⁾。

佚書「孝経」の中国里帰り 中国で亡失して日本だけに

のこる佚書の里帰りは、中国文人界で大きな反響をよぶ。別稿で『全唐詩逸』の渡清をみたが、③ 岡田挺之校『孝経鄭註』のときも、知不足齋叢書第二十一集収録本に、嘉慶七^(一八〇)年錢侗序「重刊鄭注孝経序」が付された。

「往歳、平湖賈船日本国ヨリ孝経鄭注ヲ購得^(平湖は浙江省)して帰り、余の「寓居杭州萬松山館客」に携示されたと、清商による渡清と入手の経過を語りながら、「乾隆中、四庫館ヲ開キ、詔シテ天下ニ遺書ヲ求ム。：日本ヨリ數千百年來沈淪ノ秘籍ヲ得。：神物ノ呵護、有靈ノ應運セシムルニ非ルヤ」とする。

さいしよに渡清した太宰春台編『古文孝経』の第一集収録本には、三つの序文が付された。第一序文、「東里

盧文弨」の「新刻古文孝経孔氏子傳序」(乾隆四十一年(一七七五)年)は、「此書ノ亡逸、殆ド千年ニ及ブ。而シテ一旦コレヲ復得セバ、豈天下ノ學士、同声シテ快ヲ稱スル所ニ非ランヤ。…前朝ノ刻スル所ノ書、多ク偽ヲ取ルモ、今皆ソノ真ヲ取ラバ、益セズシテ以テ国家文教之美ヲ見ル」とする。

日本における中国佚書の復元く考証く出版は、渡清しなかつた清淵本ほかもふくめ、天下の學士が快哉をさけび、国家文教の美をたかめるような、いわば一大文化事件であつた。おのずからアジア漢字圏全域におよぶものになる。

第二序文、乾隆四十一年「古海昌 吳騫」の「新雕古文孝経序」は、「古文孝経孔安國伝、世久失。其伝武林汪君翼蒼随估舶日本訪求以歸。吾友鮑君以文得之甚喜、遂刻入知不足齋叢書」とする。古文孝経は失われて久しいが、「武林 汪君翼蒼」が商船で長崎を訪れて購求し、鮑以文(淥飲)が翻刻して知不足齋叢書におさめたとする。

「汪君翼蒼」その人については、松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』(思文閣出版、二〇〇七年)がくわしい。李淩之編『清畫家詩史』には「汪鵬、字翼蒼、一作翼昌、号竹里

山人、錢塘人。以善画」(中国書店一九九〇年復刻版)とあり、「客遊日本垂二十年歳」によつて「購古本書籍帰呈四庫館、或付鮑淥飲與阮芸臺伝刻行世。有袖海編」とする。

汪翼蒼は号「竹里」をもつ文人で、編著『袖海篇』もある(『袖海編』は日本の書務事情を記す。〔王錫祺輯、小方靈齋輿地叢鈔〕所収)。二十年以上も、日本へ渡つては「古本書籍」を清国にもたらし、四庫全書館に収めたり、鮑淥飲や阮芸臺(阮元 考証多の集大成で著者)に手渡していたのである。

別稿の『全唐詩逸』を里帰りさせた海商文人「張秋琴」、および協力した訳官文人「穎川仁十郎」もふくめ、佚書里帰りという文化事件のかげに、これら海商文人の活動が多々あり、協力する日本文人も多かつたことをしめす。日本から里帰りした佚書を多くのせる鮑淥飲『知不足齋叢書』も、こうした諸活動によつてささえられていたことになる。庶民文人たる海商文人の存在と意義は大きい。

清淵の『鄭註孝経』 清淵『鄭註孝経』は渡清しなかつたが、考証開始は、さきのように序例が「天明末年ヨリ補訂ヲ志シ」とし、末尾を「寛政丙寅仲夏日 下総窪木清淵仲默謹識」(丙寅は寛政六年甲寅力)でむすぶ。寛政六(一七九四)年に本文と序例を撰筆し、自跋は「享和二年壬戌春正月」でむすぶ。その翌年、享和三年に初版が刊行された。いま『孝経

鄭氏註全／窪木蟠龍先生補訂 蘭秀亭藏 豎冊 享和三
 (〇三)年閏一月』が、目録『清宮利右衛門家文書家(統)』(『千葉縣地域史料現狀 記録調査報告書6』)にみえる(酒井石 氏教示)。原物は未公開だが、佐原村の名主文人で清淵の門弟「清宮秀堅」の蘭秀亭藏版によるもの。題名がわずかに異なり、清淵の考証「序例」でも、細部の字句が異なる(小形不鮮明写)。享和三年初版のあとで、改訂を加えたことになる。

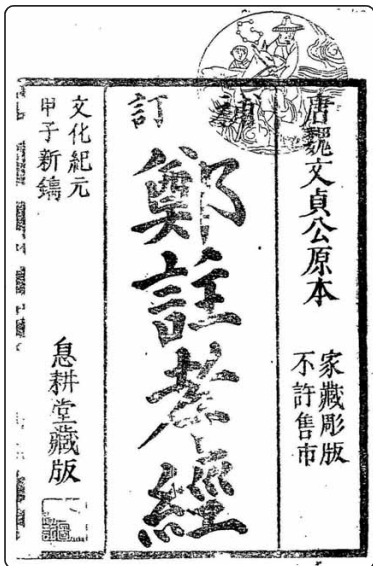
ついで文化元年の改訂第二版、息耕堂藏版『訂鄭註孝經／文化元年伊能忠敬序／享和二年正月自序』(返)文化元年十二月刻成／下総窪木氏藏)がつづく。ともに地元および文人仲間に配られた私家版であろう。延方郷校旧蔵の筑波大本で実見できた。⁵⁾

ついで文化七年ころ、あらたな跋文「書補訂鄭註孝經後／文化六年冬十一月二十八日菅 晋帥(茶)を付して刊行された。房総叢書本(以下「房」)および岩坪充雄架藏本(見込)で実見できた。後刷り補訂第三版となる。

さらに書肆版、文化九年八月刊がみえる。『訂鄭註孝經／息耕堂藏版／江戸 西宮弥兵衛／京 植村藤右衛門／名古屋 片野東四郎／大坂 秋田屋太右衛門』として全国に流布した(開四大「1746-83」は「文」)。第四版となる。

文化元年版の書誌を、筑波大本(口20)でみておこう。

「題」補訂鄭註孝經、「見」唐魏文貞公原本〔家藏彫版〕／訂鄭註孝經／文化紀元〔簽〕 息耕堂藏版〔除刻〕 息耕堂図書記、「序文」補訂鄭氏孝經序／文化紀元甲子(年)七月 伊能忠敬書 于東都深川寓居、
 「序」孝經鄭註補訂序例／寛政丙寅(一七九四寛政 六年甲寅カ)仲夏日 下総窪木清淵仲默謹識、「版心」補訂鄭註孝經(丁数)＝息耕堂藏版、
 「序例」補訂鄭註孝經(丁数)＝息耕堂藏版、「二」孝經序、「内題」孝經／鄭氏／唐魏文貞公原本／日本下総窪木清淵 補訂、「本文」補訂鄭註孝經終 男俊克明校、「版心」補訂鄭註孝經(丁数)＝息耕堂藏版、「跋」享和二年壬戌春正月 窪木清淵謹書／文化元年甲子冬十二月刻成 版藏于家 不許售市／下総 窪木氏藏、「付」ナシ。



活字版であるか否か。明記はみえない。見返しに「家藏彫版／不許售市」(挿図は岩坪
充雄藏本)とだけあり、枠隙隙間は確認できない。字体も、活字版五本の明朝体とはことなり、全体にやわらかめの楷書体である(大森三後
梅岡参照)。さきの活字版の明記のない『桂海虞衡志』の書体にちかい。おそらくともに、清冽自筆の板下による製板本であろう。

第三版の「菅茶山」跋 第三版には、さきの菅晋帥の第二跋文がつく。房総本・岩坪本にみえる。明朝体で、本文や序・凡例・自跋とは書体が異なる。なぜ刊行から六年も経て、とおく茶山から跋文が贈られてきたか。

文化六年、伊能忠敬が山陽道測量の旅で、たずさえた窪木本を神辺宿の菅茶山に進呈、そのときに書かれた跋文である。茶山曰く。

「六年前予在東都。夏五月常陸二遊じ。乃衿川ヲ舟下ス。佐原ヨリ歩キテ香取祠ヲ謁ス。至鳥居干。午飯漁戸。対門一舍。竹籬茅檐。瀟洒可愛。以テ僧徒ノ隱棲ト爲シ、意為サズシテ去」ったことがあった。いまここに伊能先生が測量で神辺駅に来たりてお会いし、「此書ヲ以テ惠」まれたが、著者「下総人窪木仲黙。名清淵。号竹窓」について「其ノ人ト其ノ居ヲ問」うたところ、香取河岸の

鳥居の近く、「竹籬茅檐」の寓居に住み、「即其号竹窓者也」と教えられた。

六年前に通ったとき気がかりだったが、「僧徒ノ隱棲」かと思ひ立ち寄らなかつた。あの「瀟洒可愛」の竹籬こそ、この書を成した清冽の住まいだったか。：。「悵然久之。跋尾有余白。遂記以弁焉」、あまりの無念さに悔い嘆くこと久しく、ようやく末尾の空所にこの文を記したとして、「文化六年冬十一月二十八日菅晋帥」とむすぶ。この茶山跋文を忠敬が持ち帰って清冽に手渡し、清冽が明朝体木活字で新摺りし、後刷本に入れたのであろう。

逆にいうと、遊歴の文人が瀟洒な居室をみかけて文人がいるかと立ち寄り、初対面で風雅交歓をたのしみむことが当然とされる時代だったことをしめす。瀟洒な竹籬を愛して「竹窓」を号しながら「鄭注本」を考証復元した清冽、その瀟洒な竹籬に心惹かれながら通り過ぎてしまったことを無念がる茶山、「鄭注本」の価値を知り尽くして序文を記すとともに、おなじく価値を認めると見込んだ茶山に測量先で贈呈した忠敬。一冊の書物をめぐり、文化価値を共有する者同士が、こうした心的交流をもった事実、注目しておきたい。一種、風雅公共圏(別編
子走)

といえようか。

師「吞舟」松永先生と「鄭注本」なぜ清淵は、「鄭注本」にかかわるようになったか。まず孝経との出会いについて、跋文でこう述べる。

「余、幼童ノ時、郷ニ北溟松永先生有リ。隱者也、而シテ程朱ヲ治メ、年已八十」とする⁶⁾。「句読ヲ学」んだ卒業の日、「教余ニ孝経ヲ学」ぶにあたり師は、「授クルニ朱子古文刊誤ト呉子今文較定ヲ以テ」して、こう言つた。孝経は、「古今文有リテ議論紛紛、好悪一ナラズ」のままであり、「文公(朱)ト雖モ、亦未ダ定論無シ」であるにもかかわらず、多くの学者が指標としている、と…。

のち師は、ふたたびこう言つた。「文公ト雖モ定論無ク、而シテ学者、孔鄭ニ家ヲ廢シ得ザル」ままできているのに、本邦の士は「概シテ古文ヲ学ビ、孔伝世ニ盛行シ、鄭氏ハ則チ蔑」されている。鄭注本はいま唯一「羣書治要所載ノ刪本ノミ」がのこる。「吾、京師ニ在リシ日、抄写シテ之ヲ蔵ス、今以テ汝ニ授」ける。この書は完本ではない。少しづつ諸家本に照らし、備忘の文もなしてきたが、遺漏多きを如何せんと…。いまだなしえぬ業を汝に託すとの意であろう。

「吞舟」松永先生がかつて学んだ京で群書治要本を手写したこと、その手写本を清淵に授けたこと、朱子「孝経刊誤」(以下刊)さえも不完全とし、古今文、また孔氏鄭氏どちらも捨てがたいとする意をつたえたこと、などがわかる。清淵は師の意をうけ、諸本を索捜考証してより正しい鄭注本の完成をめざすことになる。

清淵はいう。近年、「孝経ノ盛行シテ、古今文ノ異本、家二市ニ日刊シ、世ニ布スルモノ」多くなつたが、鄭注本だけが「或ハ譌本、或ハ刪本、其レ未ダ全カラザル」のままである。私はこれを校訂して刊行し、「以テ同志ノ者トトモニ譌本ノ妄ヲ斥シ、刪本ノ不足ヲ補」おうとした。しかし「先師没テ已ニ二十余年」、諸書の索捜いまだ疎にして遺漏多きはいかんともしがたい。意いつ果たせるか知れず、先師「僭妄之責」の免ぜざるは承知のうえで、いま自家で私刊し自読するのみ。そう記しながら「享和二(一八)年壬戌春正月 窪木清淵謹書」とむすぶ。

この跋文とは別に、「二十余年」の空白や考証開始の事情を語る文章がある。「孝経独見」で(写本、多古町米本図書館、明治十一年)「題言」(文治六年、癸巳二月)のみが清宮秀堅『三家文鈔』(明治十一年、自家版)に収録された。

鄭注本版行が延び延びになったのは、「而テ家君、亦徂徠物氏ノ学ヲ喜ブ。故ヲ以テ時好ヲ趁テ、此ニ從事シ、師ノ言ニ背馳シテ、刊誤諸説ヲ廃棄シテ十数年」、父親の徂徠好きにかまけてしまったからだ…。やがて「師ノ言ヲ顧省スル」機会があり、「二、公、刊誤諸説ヲ読ム、而テ稍々諸家ヲ尋繹」するにつれて疑問が「つぎつぎ湧いてきた…。そもそも「鄭氏果シテ北海ニ出ル」や否や…。「孔伝ノ臨淮ハ疑無キ」や否や…。(案)開元之議、卒ニ其ノ当ヲ得ル」や否や…。「宋元明清儒之説、共ニ誣罔ノ有ハ無キ」や否や…。つぎつぎ起こる疑問を「考覈ノ際、疑ウ所則チ之ヲ記シ、得ル所則チ之ヲ録シテ、而後更ニ之ヲ審ニ」してきた、とする。

いずれにせよ、清瀨「鄭注本」の考証と補訂は、永年の空白をへながら、少年期の師「吞舟」松永氏の意をつぐ形ではじまったのである。

Ⅲ. 清瀨『鄭註孝經』の考証と補訂

考証と補訂の仕方 その考証の仕方は、本文にどのような顛れるか。一つは、本文の割注補訂である。考証確実

なものを割注に入れたとする。鄭注本の割注ごとに、たとえば冒頭の「仲尼居」仲尼、孔子也。居、居講堂也。のように、「仲尼、孔子」の鄭註に、自分の考証を補として加筆し、末尾に典とした釈文をしめす。ほか「儀礼疏」「御注」「周礼疏」「毛詩疏」「華嚴音義」「後漢書注」「荀子堯問篇」なども出典としている。

二つは、欄外補訂である。考証不確実なものを欄外に入れたとする。この丁では、原本内題が「孝経」だけで終わっているのを、宋徳明の釈文と邢昺の疏(正義)に拠つて、「鄭氏」二文字を「余」が補つたとし、欄外に「原本无鄭氏字。余以釈文本邢疏、作鄭氏注」と記す。清瀨は、

<small>原本无鄭氏字余从釈文本邢疏作鄭氏注</small>	<p>孝経</p> <p>唐魏文貞公 日本総窪本清瀨 原本 補訂</p>
<small>汝釈文作女避作辟</small>	<p>開宗明義章</p> <p>仲尼居<small>仲尼、孔子也。居、居講堂也。</small>曾子侍<small>曾子、孔子弟子也。</small>子曰先王有至德要道<small>子者、孔子也。謂先王也。至德、孝悌也。要道、禮樂也。</small>以順天下。民用和睦。上下無怨。以教之。要道以化之。是以民用和睦。上下無怨也。汝知之乎。曾子避席曰。參不敏</p>

群書治要が抜粹する本文および鄭氏注を本来の姿に近づけるべく、欄外と割注に加筆する形で補訂をすすめたこととなる。

三つは、群書治要本にみえない「孝経序」の復元補訂である。諸書の引用のなかに断片を見出したとする二章句を、序のあるべき冒頭にかかげる。さきの①②および⑤にもみえない。清淵本独自の補訂ということになる。こう説明する。

「謹テ孝経鄭註ヲ案ルニ、益本二序有り。而シテ羣書治要、經典釈文、其不載之。由無ク考索スルニ、礼記註疏ニ云、孝経序、是レ鄭作タルヤヲ知ラズ。以テ此レ僅ニ其ノ序有ルヲ知ルノミ」…。釋文の類にもみえないが、「禮記註疏」(明季元 翻本校カ)がわずかに「孝経序」にふれていた…。これを手がかりに存在を予測していたが、「頃日、余蕭客ノ古経解鈎沈ノ中ニ逸文ニ条ヲ得ル」とし、「是レヲ挙ゲ以テ序逸ニ備ウ」でむすぶ。

その二条とは、『大唐新語』から引いた「僕南城山ニ於テ避難シ(巖中之 巖でか)、巖石之下ニ棲遅ス。昔ノ先人ヲ念ジ、余暇ニ夫子ノ志ヲ述ベ、而シテ孝経ヲ註ス」、および『玉海』(宋王應麟撰)から引いた「孝経八三才之経緯、五行之綱紀、

孝八百行之首為リ。経者不易ノ稱」の二章句だとする。⁽⁷⁾ほか明虞淳熙『孝経集霊』、唐白居易『白氏六帖』なども参照する。

そのうえで、末尾割注「右二條、孝経序ヲ引クト雖モ、然ルニ句意疑ウ可シ。但シ以テ取正スル所無ク、挙テ考ニ備ウ」でむすぶ。群書治要本にない「孝経序」については、探索し得た逸文に疑いあることも明記し、のちの考証のために掲げた、というのである。

尾張学派はだれも気づかなかつたが、前者「僕南城山…」については、おなじ章句に気づく清国文人がまもなくあらわれる。さきの③岡田本が渡清して所収された『知不足齋叢書』に付された嘉慶七(字和 二)年の銭侗序である。

「宋均 孝経緯 注引鄭六藝論序 孝経云、元又為之注大唐新語引鄭孝経序云…」とする。魏「宋均」の『孝経緯』が注で引く鄭氏『六芸藝』序の孝経の項に、『大唐新語』が引く「孝経序」があるとして、「僕避難於南城山棲遅巖石之下」をしめす。清淵が挙げたものと同文である。当否はさておき、清淵の考証が尾張学派をこえ、清国文人並に高レベルだったことをしめす。

いずれにせよ清淵は、群書治要本をもとに、ひろく諸

書を参照しながら、中国で失われた「鄭注本」を本来の姿に復元しようとした。尾張学派の都市文人をふくむ同じ動きのなか、遠くはなれた在村で独り、より高レベルの考証をすすめ、ほぼ同時期の二番目三本中の一本として『^{補訂}鄭註孝經』を成稿させたのである。

清澗の孝經観 こうした補訂をおこなう根拠として、清澗は孝經そのものをどうみていたか。基本的な立場を、「伊能忠敬」序(文化元年 原漢文)が、「仲黙(禮)謂」として記す。

もともと孔鄭二家の伝は「不詳其始、世論紛紛、互相非」だったうえ、「開元新註出ルニ及テ二家衰工始メ、朱子刊誤ヲ作ルニ至リテ、古今文總廢」してしまつた。以来、学者は新義を好み、ほしいままに古書を斥裂してきた。「二家ノ伝」は、たしかに「信ヲ取ル能ザル」ものだが、それ以外に唐以前のものも存しないのだから大切にせざるを得ない。にもかかわらず、古文を講ずる学者は「孔伝ニ非ズシテ(朱子)刊誤」のみ。今文を読むものは「特二(玄宗帝の)開元新註ノミ」である。いずれも「古ヲ好マザル」からである。

いま「羣書治要ヲ以テ本ト爲シ、普ク諸家ニ就テ其ノ遺欠ヲ補」うことで原形に近い鄭注本を復元して講ずれ

ば、「二家並行スル可ク、而シテ孝經ノ学、有二帰スベシ」……。孔鄭二家が並立することによつてはじめて、孝經学の有効性が実現するはずだ、というのである。

恣意的に改編された唐の玄宗御注本や宋の朱子刊誤本にはしる現状をつよく批判、「古」つまり古典史料としての孔鄭二家の並立を基本姿勢としたのである。

孔鄭二家並立論 二家を並立さすべき根拠は冒頭、八項目全四丁余におよぶ「孝經鄭註補訂序例」(以下 序例)で詳述する⁽⁸⁾。

日中の孝經学史を概観する第一項がもつともながい。忠敬序とも一部かさなるが、清澗は何をとくに強調して、二家並立論を説いたか。読みとつてみよう。

まず中国孝經学を、こうまとめる。「孝經古今文、西漢以来、世二其ノ学ヲ伝テ註釈ハ数十家ヲ下ラズ」だったが、「独リ孔鄭二家ノミ」がのこつた。さらに玄宗帝「開元詔議」が「古文ヲ斥シテ今文ヲ宗トシ、而シテ其ノ説、鄭氏ヲ用ズ」のまま「別ニ新註ヲ天下ニ頒」したため、わずかにのこつた二家のうち、まず孔氏の古文孝經が排された。今文を重んずるものも、玄宗の新註本のみで鄭注本は無用とされ、中国ではついに二本とも亡失するにいたつた、とする。

日本の孝経学についても、「学令」「三代実録」をひきながら「我邦ノ古博士家。亦タ嘗テ、家ノ学ヲ伝」してしたが、「経ヲ治ムルニ於テハ。蓋シ特ニ古文孔伝」を重んじ、今文鄭註を軽んじた。さらに貞觀二年制が、「鄭孔二注、即チ真ニ非ズト謂。御注一本、理当遵行。宜ク自今以後、学官ヲ立テ、此ノ経ヲ教授シ、以テ試業ニ充ツベシ」として、御注本のみを重んじた。⁹⁾以来、「学者、称述スル所：孔伝ヲ宗トシ、鄭氏則チ終ニ聞ク無キガ如」くになった。僧奝然が入宋して太宗に献じた鄭注本も、「遂ニ湮滅ニ至テ復タ見ルベカラザル」になった。幸いにも「羣書治要所載者、独リ我^(甲)ニ存」している。：。「全本ニ非ザルモ、而シテ以テ其ノ逸ニ備ウニ足ル可キ」ものだとする。さきの師呑舟の言につうじる内容である。呑舟・清淵の師弟は、中国での玄宗帝『御注』の恣意的な改変、定論なきままの朱子『刊誤』、日本での『刊誤』の流布と偏重、古文孔伝本への偏重と今文鄭注本の軽視など、日中双方の孝経学を批判し、だからこそ今文の古本『群書治要』鄭注本を復元すれば、古文今文の並立と孔鄭二家の並立を、同時に実現できると考えたのである。たしかに朱子『刊誤』は国内でもてはやされ、和刻本

も版をかさねるが、今文の内容は御注本にしたがつて数章をけずり、章名などもはぶいている。古文今文のちがいの冒頭割注で、「古今文有不同」としながら「別ニ考異ヲ見ル」としただけで、「考異」未完のまままで終わっている。「文公ト雖モ定論無シ」は、ほぼその通りであろう。呑舟・清淵ともに、朱子や日本古学派などを一括批判する姿勢は、別稿でもみた在村独学派につうずる。

これらをふまえて清淵は、「天明末年ヨリ補訂ヲ志」し、「羣書治要中ニ之ヲ拔」きだし、「^{かたがた}旁諸家ニ就キテ比校補綴シ、以テ一書ト成」した。：。まだ完全ではないが、「此レニ因テ以テ鄭氏遺説ヲ考シ、而シテ孔伝ト俱ニ其ノ旧説ヲ存スルヲ庶幾ス」とする。

より原本にちかい「鄭氏遺説」を復元することによつて、「旧説」つまり古典的言説としての孔伝・鄭註の二説並存をねがつて補訂し刊行した、というのである。

良芸之への批判 したがって、不確かな復元や、孔鄭いづれかに偏重する論についての批判は厳しい。第一項の最末尾の割注で、さきの宝暦三年第一本の①良芸之「孝経鄭註」をこう批判する。「世ニ讃岐良伯耕、校刻スル所ノ鄭注一本有り、以テ奝然之遺本ト爲ス。之ヲ経典釈文、

邢疏ト考スルモ、毫毛相渉ラズ、全テ贗本ニ属ス、今取ラザル也」。良芸之のいう「奄然之遺本」は、唐の陸徳明『經典釈文』、宋の邢昺『孝經正義』などと参照しても合致しないので、採用しないというのである。

清澗はこれ以上なにもいわないが、これにちかひ言が、先⁽¹⁾に上総夷隅郡出身の宇佐美瀧水『瀧水雜著』^(房総叢書、年記ナシ、安永五年歿)にみえる。「先年孝経ノ鄭玄ガ注ナリトテ、京洛ノ書生ガ板刻セリ(良伯群のこと。で宝曆三年刊)。陸徳明ガ經典釈文中ノ孝経ノ音義(陸徳明著。経音義)ハ鄭注ノ音義ナレバ、合ヒモヤスラント音義ヲ合セテ見レバ、音義ノ文字、注ニ一向出デズ、然レバ僞鄭注ニ疑ヒナシ」とする。清澗は邢昺も照合したが、宇佐美は陸徳明との照合だけで「僞鄭注」としたことになる。宇佐美の原本は地元房総だけにのこつたらしく、『房総叢書』^(一九三二年出。所記載シ)によるほかないが、清澗が目にした可能性もあろう。

贗本とされた良野本をみよう。自序はこう語る。「予、^{たまたま}適⁽¹⁰⁾奄然之遺本ヲ得」たが、「岡生⁽¹⁰⁾有リテ予ノ門ニ遊ビテ梓ヲ請ウ。予、コレヲシテ是ヲ校セシム。同異ヲ三家ニ考工、誤字ヲ異本ニ訂スル、其ノ業甚ダ勤タリ。予且ツ句ヲ以テ授」けた。ここに「東西ノ註家(孔氏 鄭氏)」歴史トシ

テ当世ニ備ウト謂ウベシ」…。たまたま得た「奄然之遺本」を、門人の岡田某の願いにより校訂させ、みずからも考証の章句をあたえて刊行にこぎつけ、鄭注本・孔伝本ともに世にそろえることができた、というのである。

「奄然之遺本」とはなにか。良芸之の説明はない。『宋史(外国伝)』によれば、「其ノ国、多ク中国典籍有リ。奄然來復シ、孝経一卷、越王孝経新義第十五一卷ヲ得ル。皆金縷紅羅ノ標(表裝飾)、水晶ヲ軸トナス；孝経ハ即チ鄭氏注」とある。「奄然之遺本」がありうるすれば、入宋をひかえた奄然が、献呈用の「金縷紅羅ノ標」裝飾本の原本とした国内写本、あるいはその写しとなるう。

はたしてそれが「奄然之遺本」としてのこり、良芸之が実見したか否か。奄然に縁のふかい寺院にのこる可能性は高いが、確証はない。偽称もあり得よう。⁽¹¹⁾

良野本贗本説の当否 良野本贗本説は諸本にみえるが、孝経本文は、異体字のほかは一字をのぞき(孝治章「治家者」を「國家」とする)、諸本との異同はみえない。考証も、たとえば章名「開宗明義章第一」の頭注に「孔本義作誼」と記すなど、孔伝本とも照合している。少なくとも良野本の孝経本文は、偽作ではなからう。

清澗が照合したという陸徳明『經典積文／孝經音義』、邢昺『孝經正義』(以下『正』)ともに、御注本の註と疏、つまり注釈と、陸・邢らの又注釈である。「疏」はおのずから良野本とは異なる。「註」でもたとえば冒頭、良野本は「仲尼居仲尼、孔子弟子、魯名丘、居魯、曾子侍曾子、孔子弟子、魯、曾子侍曾子、孔子弟子、魯、曾子侍曾子、孔子弟子、魯」とし、傍点部が異なるが、「燕居」は世事をはなれ安らかにくつろぐことで、「閑居」つまり「閑居」と同義語とされる。良野本の曾子についての「名參、字子輿」も、正しい。少なくとも鄭註での差異は、手写本での同義語のちがいの範囲にとどまる。

賈本説はのち⑤東条一堂『孝經鄭氏解』がひきつぎ、「明許朝宗之撰造」の「賈作」を良芸之が無知のまま自己のものとした「賈鄭註」であると断じた。そのまま昭和期にも引用され、「許朝宗」は未詳のまま放置、傍証ぬきで「似もつかぬ賈本」とされる。⁽¹²⁾「尙然之遺本」の良野の言は確証なしとしても、註釈部分がわずかに異なるだけで賈本と断じられるか否か、検討の余地がある(後述)。
清澗と良芸之のちがいは、むしろ孝經觀そのものの相違にあると思われる。良芸之序は、「予、嘗テ孔者伝古

文ヲ疑ウ。鄭ハ今文ヲ註シ、御註亦タ今文ニ依ル、其ノ余ノ註、多クハ今文」に依っている…、「孔伝ハ蓋シ偽タリ、先輩共ニ既ニ之ヲ疑ウ。予、亦タ然リ」。つまり、孔伝本を偽書だとする清国文人界の今文尊重論に組み合っているのである。さきにみた吞舟・清澗の、古典としての孔鄭並立を基本とする立場とは、大きく異なる。⁽¹³⁾

清澗が良野本を「全テ賈本ニ属ス」としたのは、「尙然之遺本」を自称したことでなく、良芸之の御注本・今文への偏重、および孔伝偽書説への批判をふくめたものと考えられる。

唐代流布本をめざす 賈本説で細部に入りすぎたが、ここまでが窪木本の「序例」第一項36行と割注約20行のおよそである。ついで第二項全二行では、群書治要本の本文で欠くところ補った点について、「魏公原本不載ノ喪親章、及び其ノ他去ル所ノ数処、今御註本ニ仍リ、經典釈文ヲ以テ參」したとする。第三項全五行でも、割注は当時すでに「遺欠」されていたとしながら、「釈文 御註 邢疏及び諸書所引ノ鄭註ト称スル者ヲ考」し、すべて割注を復元しておさめた、とする。

第四項では、「經典積文 孝經音義、鄭氏ヲ以テ主ト為

ス」が故に、その著者である陸徳明を重視したこと、第五では、近年の清の朱彝尊は「経義考所載、…他説ヲ引テ釈文ニ入レル。鄭氏ノ旧ニ非ズ。今取ラズ」で採用しなかつたこと、第六では「鄭氏説ニ似ル有リテ、而シテ未ダ其ノ証詳ナラザル、…コレヲ上層ニ標シ^ス。以テ参考ニ備ス」、つまり「鄭注ノ旧」に合うか否かで諸書を厳選し、不確かなものは欄外^(先)に注記した、などとする。

そして第七項、鄭注本を刊行することが目的なので、「諸家同異ハ、急グ所ニ非ズ」とする。第八項では、群書治要本について「原本ハ章名無シ。…晉宋古本モ蓋シ章名無シ」だが、唐の「釈文^(陸徳明撰 録 典釈文)」ハ現ニ其ノ目ヲ標ス。則チ当時^(唐)ノ行本ステニ此ノ如シ」であるから、「釈文ニ依テ之ヲ標」し、章名を補訂した…。経字数は釈文に無いのでとらないとする。全体に唐の陸徳明撰『釈文』を重んじ、宋代散逸以前の「鄭注本」、唐代流布本にできるだけ近づける形で、補訂をすすめたことになる。

そして末尾、さきの「天明末年ヨリ補訂ヲ志シ…」につづけて、「農事ニヨリ時ニ専心スル能ズ。…涉覽シテ何ゾ其ノ遺逸ヲ悉ク求メ得ン。聊力以テ遺忘ニ備ウルニ存スルノミ」、ふだんの生業があるので孝経一筋には専念で

きぬまま、すべての書までは渉覽できなかつたとして、「下総窪木清淵仲黙 謹識」とむすぶ。

謙遜をあらわす章句に、業雅兩立に生きざるを得ない在村文人の内実を記したことになる。

窪木本への国内評価 こうした窪木本^(補訂)『鄭註孝経』の版行は、国内でどう評価されたか。⑤ 東条一堂の文化十一年序『孝経鄭氏解』がはやい^(東条一堂は房総出身。弘前備のち江橋)。冒頭「提要」で、「近ク窪木仲黙、補訂鄭注ヲ撰ス。始テ治要ヲ以テ藍本^(底本)ト為ス。普ク衆家ニ采テ之ヲ補苴^(マ)ス、証左考覈、頗ル允愜^(適)ヲ為ス、之ヲ忠賢ノ遺注ト較スルニ、搜索ノ博、ナンゾ畜ニ倍蓰^(數)ノミナラン」と称えたとうえで、窪木本の刊行が岡田本より先であれば、「ソノ振墜ノ績、亦夕鉅タリ。吾、二子ノ為ニコレヲ惜シム」とする⁽¹⁴⁾。

刊行の遅れをのぞき、はじめて群書治要本を底本としたこと、諸家にあまねく目配りしたこと、考証の秀逸なこと、諸本探索のひろさは数倍どころではないことなどを、たかく評価した。今に通すべき評価であろう。

いずれにせよ窪木清淵^(補訂)『鄭註孝経』は、群書治要本による「鄭注本」の数少ない復元版の一本として、在村で編著く蔵版されたことになる。

IV. 清瀨補訂本の影響と越後の私塾師「藍澤南城」

清瀨補訂本の影響 以上、上総窪木清瀨の鄭注本復元と考証および覆刻のようすをみてきた。清瀨の考証を語る「序例」は、さきの第一項の孝経学がもつとも長かったが、のちここから十二行(割注の筆多)を引用しながら、孝経注釈書『孝経考』(年記)を著した。在村漢学者がいる。

越後柏崎ちかく、南条村加納(いま柏崎市)の私塾「三餘堂」の主宰「藍澤南城」、名砥、字子敬(寛政四、万延元年以下、南城)である。窪木木活字本の一つ『李氏易傳』も所蔵している(現存)。二人ならんらか直接のかかわりをもつ観もみせるが不明。ともに、折衷在村独立派ともいうべき存在である。冒頭の在村における孝経第二のあり方、私塾をもつ在村文人の注釈書執筆の動きでもある。⁽¹⁵⁾

「孝経考」を表題とする書は、各地に十数冊のこる。ほか講・釈・述・解・説・註・疏・国字などを付す注釈書や啓蒙書は、数知れぬほど多い(国書総目録)。孝経は、漢学者であれば一度は注釈本をこころざすものだったらしい。

藍澤南城(寛政四、万延元年、年六十九歳)、名砥、字子敬、通称要助、号南城

(以下、南城)。父「北溟」(北溟)⁽¹⁶⁾は、折衷系の片山兼山に学び、越後片貝村(いま少千谷市)設立の郷学「朝陽館」の師匠に招かれた。「衆生寄集」つたが、南城六歳の寛政九年、四十二歳で若死にした。

母とともに南条村加納へもどった南城は、成長して同じ兼山門下「松下一齋」に学んで文政期に帰村、私塾「三餘堂」(以下、三餘堂)を開いた。⁽¹⁷⁾多数の門人があつまり、粟生津村「長善館」(いま燕市)とともに、越後私塾の双壁といわれた。遭された蔵書・著作・門人録・板本などが、県指定文化財「南城文庫」として柏崎市立図書館および新潟県立図書館にのこる。

南城「孝経考」の著述と考証 南城の考証法を、『孝経考』にみよう。底本は「古文孝経」をえらびながら冒頭、清代もふくむ中国の偽書説をとりあげ、これを否定する。

「呂子春秋／孝行覽」の「愛其親不敢惡人…、空於四海、此天子之孝也」ほかを引きながら、「祇云」としてこう記す。これらは「孝経」の「天子章」「諸侯章」などの文章と一致する…、この書が秦より先に存在して「孝経」と称されたのは確かである…、近年の「清人姚際恒」(古今考、ほ)ほか「漢人之偽作」説の謬妄は明らかだ、と…。秦

以前の書との合致をもとに、孝経の存在を正しいとみなす姿勢である。

また「乾隆四庫全書簡明目録」を引きながら、「鮑廷博（知不）が市舶から得た「漢孔安国撰日本信陽太宰純」や（足齋）「日本所刊七経孟子考文」（佚書として珍重）も孝経の存在を証している。それでもなお「偽本」とみなすのは、奇を好む者の「誤信」だとする。

さらに『御注孝経』について、玄宗皇帝序に読みとれる「孝経旧注、踳駁（駁）尤甚」や、疏にみえる「孝経今文称鄭玄注、古文称孔安国註、先儒之、皆非真実云」をとりあげ、諸説を引用して反駁する。その冒頭に、「下総窪木清淵字仲黙者、刊魏徵羣書治要所載鄭注孝経。其序云：」として、清淵の序例（最長の辨理）を援用したのである。

さきの「我邦ノ古博士家。亦夕嘗テ、家ノ学ヲ伝ス」にはじまり、「羣書治要所載者、独り我（日本）ニ存ス。全本ニ非ザルト雖モ、而シテ以テ其ノ逸ニ備ウニ足ル可シ」および、割注の良芸之「奄然之遺本、全属贋本、今不取也」まで、延々十二行（割注のそく本文だが、けでも百三十八字）、諸引用の中でもっとも長い。

引用の途中、『崇文総目』『文献通考』など南城みずか

ら調べた奄然記事も割注で挿入し、伊藤仁齋・片山兼山・朝川善庵らの言及にもふれながら、以上の諸説をみれば、どうして「御注序ノ所謂孔鄭ハ皆真実ニ非ザルノ言ヲ証」とすることができようか、と結論づける。

なお善庵『孝経私記』（文化七年刊）について欄外補注で、「朝川善庵所著 孝経私記、亦夕窪木之言ニ同ジ。窪木補訂スル所ノ鄭注、文化元年之ヲ刊ス。朝川之述、七年之後」とし、先行の窪木本を尊重する。

いずれにせよ南城『孝経考』の考証と叙述は、孔鄭二家の孝経の存在を確証するものとして清淵本ほか数書をしめし、清国文人界に生じた「孔鄭ハ皆非真実」論を否定することから起筆したのである。

朱子『孝経刊誤』批判 さらに、光武帝・明帝・五代史や清和帝・実朝將軍などの孝経へのかかわりにふれる諸書を引き、孝経の「孝」の字、「経」の字、章の数、章の名などを考察しながら、孝経本文を「第一開宗明義章」からこまかく検討する。

とくに朱子『孝経刊誤』の誤りについては、具体的に、「大雅云以下二句、下諸章、亦皆刪去」にある、と指摘する。朱子が、孝経原文にある詩経の「大雅云、無念爾

祖、聿脩厥劬」の二句、および「下諸章」後半の四章すべてを削除し、一章に統合してしまった。『朱子八古文辞ヲ知ラズ、以テ詩書ヲ引クヲ不穩当ト為ス』からである。『其ノ非タルハ論ヲ待タザル也』と断罪する。

四つの章の削除統合についても、「幸平章第七」で「朱子孝経刊誤ヲ作り、初章ヨリ、此章ニ至ル、合セテ一章ト為シ、而シテ子曰者二（所）、文書ヲ引ク者一（所）、詩ヲ引ク者四（所）、凡テ六十一、字ヲ刪去シ」してしまつた。しかも、それをもつて「経文ノ旧ニ復ス」などと称している。『僭妄ノ甚シキト謂ウ可シ』というのである。後半『乙之卷』でも、「朱子、今文ヲ以テ古文ヲ視ル」など、玄宗帝の御注本に偏重した朱子の基本姿勢をつよく批判する。呑舟・清淵・南城ともに朱子の手法を真つ向から否定する姿勢は、いかにも在村折衷独立派らしい。とおく越後に住する南城が、房総の清淵本を長々引用したのは、玄宗帝『御注』以来の鄭孔排除と今文偏重、恣意的に改編された朱子『刊誤』の国内流布などを批判する点で、意気相通するものがあつたからと考えられる。南城の窪木木活字本『李氏易傳』所蔵もおなじであらう。

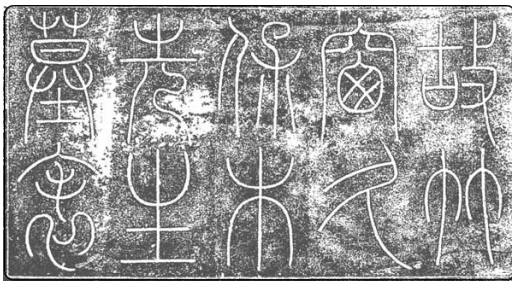
清淵・南城の年令差はちょうど三十才。こうした在村

漢学者同士の、世代をこえ遠距離もこえた直接間接の交流は、各地で多々みつかはらずである。

おわりに

以上、下総津宮村の名主文人、「窪木清淵」の書物出版活動をみてきた。前半では、宋の蘇軾『蘇東坡志林』や范成大『桂海虞衡志』などいわれる「遊志」、および、蘇軾『蘇氏易解』や唐の李鼎祚『李氏易傳』など易経注釈書を、手製木活字によつて自家蔵版したものをみた。安価で簡便とされる木活字版の効用が、「同好ノ資ニ供」する在村でこそ生かされた観を呈する事例であつた。

後半の「鄭注本」復元考証では、青年期に『群書治要』所収「鄭註孝経」の写本を入手していた無名の師「松永北



溟」とのやりとり、清淵が復元考証にとりかかるまでの経過、一般儒学界の「御注本」「朱子刊誤」「古文孝経」への偏重批判などをみながら、清淵の復元考証が、鄭注本の復元による「孔鄭二家並立論」に収斂することをたしかめた。とおく越後在村の若き私塾師「藍澤南城」が、清淵蔵版の木活字本『李氏易傳』を蔵するとともに、「御注本」「朱子刊誤」偏重批判など相通ずる考え方で、みずからの考証書『孝経考』に、清淵の考証を長々引用するようすもみた。

清淵の墓と墓誌は、津宮村の香取社寄り、標高三〇餘余の小山の中腹にある同家墓所に、小宮山楓軒撰、立原翠軒男の立原任書でのこる。篆額もふくめ、名筆とみなされる(註釋 福氏)。篆額「故竹窗久保木先生墓表」と、「水戸 小宮山昌秀撰 立原任書」を刻む部分をしめしておく(拓本は誤)。



【注】

- (1) 古文孝経は漆と竹べらで書いたとされる古代文字「蝌蚪文字」によるもので前漢時代に孔子旧宅の壁中に得たとされ、孔子の子孫と称する孔安国の「伝」注釈書で二十章がのこる。今文は秦代の隸書体で、鄭氏の「註」で十八章がのこるとされる。窪木清淵の概要は、「久保木竹窗」として森銑三がはやくにとりあげる(著作集八)。旧帝国図書館『楓軒紀談』の引用も入れる。本稿は在村文化における書物出版活動としてみるもので、「書物・出版と社会変容」研究会二〇〇八年四月十二日例会報告「下総津宮村名主文人」窪木清淵の書物出版活動―蘇東坡・范石湖志の手製木活字出版と『訂鄭註孝経』の考証と出版―をもとにした。在村における孝経の第一、三は、拙稿(原州 中野)「在村漢学者」山田松齋の書物出版活動(三)、「在村文化研究」二二号(二〇〇七年一月)、うち山田松齋「孔伝本」復元考証は拙稿(原州 中野)「在村漢学者山田松齋『古文孝経』古活字本の覆刻と考証」「書籍文化史」第八集二〇〇七年一月。第四は、岩坪充雄・土藤航平・久野俊彦・谷口眞子・杉仁共編「書き物としての碑文―武州・上州の郷学碑・孝経碑・師匠碑、拓本と現地調査―」「書物・出版と社会変容」第4号(二〇〇八年三月)所収。な

お同研究会の共同調査として、岩坪充雄氏による「窪木清洵墓誌」拓本(後述)を得、末尾に掲げることができた。記して謝する。

(2) 「伊能図」の作成などについては『伊能忠敬』(大谷亮吉編 一九一七年)および「測量日誌」。「御用」の旗は清洵筆とも。清洵墓誌は「故竹窓久保木先生墓表／水戸小宮山昌秀(楓軒)撰／立原任書并篆額／文政十三年」。文字解説は川崎喜久男『筆子塚研究』香取郡「ハ多賀出版一九九二年)も参照した。清洵その人については『佐原市史』(一九六六年)がわずかにふれる。

(3) 木活字本については鈴木俊幸・岩坪充雄両氏の教示を得た。記して謝する。また『近世活字版目録』多治比郁夫・中野三敏共編、青裳堂一九九〇年(以下「活字」)も参照した。「木活字本」であることは①③④⑤の見返・序・跋などの

傍点部に明記され、枠隙隙間ほか木活字本の特徴が確認できる。なお③呂氏兄弟の「郷約」は久世代官「早川八郎左衛門」も領域教化で「呂氏郷約俗解」を刊行している(『久世代官早川八郎左衛門―民政資料―』所収)。以下「原漢文」は一部をのぞき力ナ混じり読み下し文に直した。

(4) ①の「良芸之」(うんしんか)は讃岐出身で京の儒者「良野華陰」(元禄十二)

(年不明)で『平安人物志』(明和七年)巻之一「学者(備土医家商賈)」項に「良芸之／字伯耕 号華陰／綾小路室町西へ入町／良野平助」とある。江戸に出て昌平黉で林鳳岡に学び、輪王寺門跡に仕えてのち京にうつり、勤修寺門跡の賓師として綾小路で開講したという。早大本のほか「東大(文政六)」京華文軒中西卯兵衛等の後印本がある。②の河村益根(文政二年)は、尾張藩主宗春に仕えた「河村秀根」の二男で岡田挺之に師事、秀根『日本書紀集解』の完成に協力、詩歌・書に長じたが病弱で仕官せず、私塾師で生きたという。③の岡田挺之は号「新川」、藩儒松平君山に師事し、細井平洲のもとで『群書治要』校刊に従事、再興された藩校「明倫堂」教授。河村・岡田ともに尾張版『群書治要』の編集事業にかかわる尾張学派として「鄭注本」にかかわったことになる。⑤の東条一堂(安永七)は逸見氏、字子毅、上総夷隅郡の医師の子で、皆川淇園に師事、江戸で私塾をいとなみ朝川善庵・佐藤一斎・尾藤二洲らと交わったとされる。

(5) 以下④窪木本は筑波大本・岩坪充雄架蔵本・『房総文庫3』(一九七)覆刻版ほかによる。筑波大本(1860)は、清洵もかかわった「延方學校」の蔵本らしく、印記「杜城圖書館藏」「林文庫」「北総林氏藏」(三印とも、林奉輔)、「水戸延方學校之

印」、「延方學校之印」、「岸本氏」、および封面に「魁星印」ありとする。なお筑波大本は、さきから出てくる「寛政丙寅^{ママ}」について欄外に「…丙辰誤^(寛政八年)」との旧蔵者注記があるが、干支の勘違いの可能性は十二支より十干が高いと考え、ここでは「甲寅^(寛政六年)」とした。

(6) 「松永先生」について『香取郡誌』(一九〇年)は、「北溟」松永友也は紀州有田郡の人で香取根本寺住職「吞舟」、博学多才にして物にこだわらぬ活達人だつたとする。吞舟が学んだのは朱子学らしいが、益軒・仁齋・徂徠・南郭らを痛罵していたとされる。本宮三香「松永北溟略伝」『房総土研究』一九四〇年。

(7) 余蕭客は字仲林、号古農。顧炎武・黄宗羲らにつぐ考証学者とされる。『古經解鈎沈／三十卷』は乾隆二十四年自序。序の原文は「僕避難於南城山。棲遲巖石之下。念昔先人。餘暇述夫子志而註孝經劉肅大唐新語／孝經者。三才之經緯。五行之綱紀孝為百行之首。經者不易之稱玉海」。

(8) 窪木本「序例」は全8項目、「按」の長い割注ふくめ全72行。鄭注本の考証は最もくわしい。前掲他本(良野本
岡田本)は孝経亡失と底本について序15、30行程度にとどまり、ほとんどが太宰本「古文孝経」を典拠とする。⑤ 東条本の冒頭「提要」は割注ナシ6項78行だが、内8行は清淵本

への言及、13行が清淵「鄭玄序」の引用、約20行で「知不足齋叢書」にふれ、実質考証は37行にとどまる。窪木本の考証がもつとも長い。

(9) 『学令』『三代実録』の引用は別稿でみた山田松斎の考証にもみえたが、これら国内の孝経論は、『古文孝経／孔安国伝／太宰純音』の太宰春台序に拠るものが多い。この「岡生」がのちの岡田挺之である可能性が高いがこの年十六歳。「岡生」が岡田挺之とすると、岡田本が師の良芸之のことに何もふれないうえ、後刷が良芸之序文を自序のうしろにおくなど不自然さがのこる。

(10) 原本は、尙然入宋に協力する東大寺ほか南都僧がかかわつたか。『先哲叢談』『良野華陰』の項は、根拠はしめさないが「釋尙然之遺本ヲ南都ニ得テ校定之ヲ刊」したする。なお、のち知不足齋叢書所収岡田本の鮑廷博跋(高麗辛酉年)は「所謂羣書治要ノ輯、何人ノ刊ヨリ、何代ニ於テ、何ヲ以テ久シキヲ歴テ傳ラズ、近時ニ至リ始テ世ニ行ル、其ノ所収ノ是否ヲ知ラズ」としながら、「尙然ノ宋ニ獻ズル原本(原)尙然獻宋原本、或ハ後人ニ由テ他書ヲ掇拾シテ以テ成ルヤ、茫茫煙水、從執無ク問難シ」とし、岡田が何もふれない「尙然獻宋原本」の存在を想像する。

(11) 昭和期はたとえば林秀一「本邦に於ける鄭註孝経の刊行

について」（『漢文学講座四』一九三三昭和八年）。林もふれるが「明許朝宗」は未詳。ネット上に『金門許氏族譜』「明許朝宗字彰會、福建金門珠浦（金城鎮）人。：舉進士、官戸部主事」がみえるが不明。以上、良野本贋本説については教示を乞う。

(13) 近現代の孝経学での真偽論はさておき、この時点での孔伝偽書説か孔鄭並立説かである。つぎの藍澤南城の真偽論もおなじである。

(14) 東条一堂が窪木本より岡田本を先とする点について林泰輔は、理由は示さないが清淵本が「岡田氏に先だちしこと明らかなり」とする（『小宮山樞軒久保本清淵』（八年））所引「窪木竹窗の補訂鄭註孝経」（大正期）。

(15) 『孝経考全』甲乙二冊（全七）、自筆草稿、年記ナシ。〔内〕孝経考／越後 藍澤祇子敬甫 中〔印〕藍澤義塾。藍澤南城所蔵本は新潟県立と柏崎市立の図書館にのこる。『孝経考』は新潟本、『李氏易傳』は柏崎本の複写を得た。

清淵本を引用するとともに清淵蔵板『李氏易傳』を所蔵する南城は、清淵となんらかの關係がありそうだが南城書簡集等にもみえず、未詳である。

(16) 藍澤北溟（宝曆六年、寛政九年）。名仲明、字子晋、号北溟（暎）、梁水とも。在村漢学者「寺沢石城」に学び、江戸へ出て片山兼山に入門、帰郷ののち三島郡片貝村（小寺）の郷学「朝陽館」にまねかれ、眼科の診療にも病者が集まったという。たが寛政九年、六歳だった南城を遣し四十二歳で早死した。在村郷学の一例として別考する。

(17) 「三餘」は中国史書『魏志』「冬者歲之余、夜者日之余、陰雨者時之余也」に拠る夜・陰雨・冬三つの農閑期のことで、「三余」「耕余」名をつけた私塾・郷学・寺子屋は全国に多い。みづから農耕にもたずさわる塾師や百姓の身で漢学を学ぼうとする塾生の生き方など、在村漢学のあり方を象徴する語といえる。